

P2-B-0576**当院での人工膝関節全置換術施行患者の自己効力感の傾向**

比嘉 誠伍, 喜納 将克, 野里美江子, 中松 典子

浦添総合病院

key words 自己効力感・人工膝関節全置換術・疼痛**【はじめに、目的】**

当院では人工膝関節全置換術 (Total Knee Arthroplasty 以下 TKA) 施行患者に対し、術後 2 週間 (以下 2w) プロトコルを設定し術後の理学療法を行っている。しかしながら、患者によっては自宅退院が術後 2 週間以上かかるケースもあり、月々のプロトコル達成率変動があるのが現状である。プロトコル達成のためには身体機能以外に患者自身のリハビリへの意欲、自主参加などのモチベーションが影響している。そういった精神機能を評価する指標として、自己効力感が用いられている。そこで今回、自己効力感に着目し、当院で TKA を施行した患者の自己効力感と身体機能の関係を明らかにすることを目的とし、以下の調査を行った。

【方法】

当院で変形性膝関節症と診断され、TKA を片側、両側施行された患者 31 名 (男性 8 名, 女性 23 名 平均年齢 71.6 ± 7.3 歳, 片側 21 名, 両側 10 名) を対象とした。併存疾患として精神疾患, 認知症, 心疾患などの循環器疾患がある者, その他, 医学的に介入が困難と判断された者は除外した。測定項目は、1) 自己効力感 (self-efficacy for rehabilitation outcome scale: 以下, SER), 2) Timed Up and Go test (以下, TUG), 3) 疼痛 (安静時・荷重時・歩行時, Visual Analog Scale: 以下, VAS), 4) 術側膝筋力 (屈曲・伸展), 5) 術側膝可動域 (屈曲・伸展) とし、術後 1 週間, 術後 2 週間に計測した。術後 2w で退院した患者をプロトコル達成群 (以下, 達成群) とし、術後 2w 以上かかった患者をプロトコル逸脱群 (以下, 逸脱群) とし、2 群間のデータの比較、また片側 TKA 群と両側 TKA 群の 2 群に分けてのデータの比較を行った。統計学的分析は達成群と逸脱群の 2 群間、片側 TKA 群と両側 TKA 群の 2 群間の各測定項目比較には、Mann-Whitney U 検定を使用した。各項目の変化量の差異を Wilcoxon の符号付順位検定を用いて求め、各測定項目の相関関係は Spearman の相関を用いて統計処理を行った。統計ソフトは JSTAT for Windows を使用し、有意水準は 5% 未満とした。

【結果】

術後 2w プロトコル達成率は 77% (24/31 名, 片側 18 名, 両側 6 名), 逸脱率は 23% (7/31 名, 片側 3 名, 両側 4 名) であった。プロトコル達成群と逸脱群の SER, TUG に有意差はなく, その他の項目との間には相関関係は認められなかった。また片側 TKA 群と両側 TKA 群の比較では、術後 1w から 2w にかけての SER 変化量に有意な差 ($p=0.02$) があり, 片側 TKA 群のほうが有意に向上していた。さらに片側 TKA 群を対象にした SER 変化量と歩行時痛の変化量の間には有意な相関関係が認められた ($r=0.60$, $p=0.01$)。

【考察】

今回、当院においてプロトコル達成群と逸脱群、片側群と両側群の比較では SER と身体機能の相関関係は認められなかった。先行文献においては、SER と TUG との関係性が示されているが、先行文献では対象者に人工膝関節単置換術施行者も多く含まれていたという点で、本研究との結果の違いがみられたと考えられる。しかしながら、術側別でみると片側 TKA 群では術後 1w から 2w にかけての SER 値の向上が認められ、SER がプロトコル達成に貢献している可能性が考えられた。また、片側 TKA 群の SER と歩行時痛の変化量に相関関係が認められた。自己効力感を高める要因として、遂行行動の達成、代理的経験、言語的説得、生理的・情動的状态が挙げられ、疼痛は組織損傷に結びつく不快な感覚・情動であり、生理的・情動的に SER を低下させる 1 つの要因になっていると考えられる。そのため、術後の疼痛管理が重要となってくる。加えて当院では、TKA 術後患者を対象に集団リハを行っており、この取り組みが、遂行行動の達成、代理的経験につながり SER が向上したと考えられた。

両側 TKA 群では 1w から 2w にかけての SER 値に有意な変化はみられなかった。しかし、両側 TKA 群は術後 1w 時点での SER 値は、片側 TKA 群より高く、術後 2w 時点でもその高さは維持できていたことから両側 TKA 群は入院前から高いモチベーションを持っている傾向にあることが明らかになった。

今後は SER がプロトコル達成にどのように貢献しているかを調査し、SER をより向上させる要因を分析することで、それに応じた取り組み、対策の立案が必要であると考えられる。

【理学療法学研究としての意義】

プロトコルを達成するためには身体機能だけでなく精神機能も含めた包括的なアプローチが必要と考えられる。SER という評価指標を用いることで患者のリハビリ意欲を客観的に評価することができた。本研究の結果はリハビリ意欲を促す対策立案の一助となったと思われる。